表5　館外貸出の利用冊数の構成

利用冊数	利用人員	構成比率
1 ～ 30冊	1,576人	94 %
31 ～ 60	89	5.3〃
61 ～ 90	8	
91 ～ 120	2	
計	1,675	

3　レファレンス・サービス

参考事務とか調査相談とかいわれて，利用者が図書館の利用に馴れ，問題に関する資料を検索する場合の相談を受けたり，利用者に代って問題を調査したりするのがこの業務で，特に図書館利用に馴れていない成人に対しては，次のような助言を与えるように努力した。

① 資料を探す出発点は，なんといっても図書のカード目録である。このカードは，分類目録，著者名目録，書名目録の三種が用意されていて，同一の図書が，これらの三つの観点から引き出せるようになっていること。

② 参考図書というのは，reference books の訳語で図書館用語であるが，具体的にいえば，辞書，事典，年鑑便覧，図鑑，人名録，書誌（目録，解題），索引，年表，統計資料等のことで，たとえば，高山植物の名がわからないときは，図鑑と照合すればその名を知ることができる。

このようなことを毎日入替る利用者に周知せしめた結果，いわゆる読書人でないと見られる利用者も，二度三度と自由に資料を利用している傾向が見られるようになって来た。ただ学生，生徒のリポート作製の場合は，職員が十分に手がまわりかねて，資料の検索が十分でなく，一冊か二冊の図書に頼ってまとめ上げている姿も見受けられるので，これは自分で自分の主体性を放棄することであり，できるだけ手広く資料を集め，それらを比較検討して，自分自身の結論を下し得るように，学校教育においても指導されるようにお願たをしたい。

本年度の処理状況は表6の通りである。件数から見ると，昨年より100件ほど多く615件，うち文書によるものが，33件，582件が口頭，電話となっている。また文書中県内7，県外25というように県外はすべて郷土資料に関するものである。

件数から見るとさして多くは感じられないが，単なる図書についての相談，生徒の学習相談とかいったものは数字としては載ってこないが，実際には2～3名の担当職員は，一日中席暖る暇はない状況である。また当館に利用者の目ざす資料がない場合には，例えば大学の図書館に連絡をとりその便宜をはかるとか，他県の図書館から相互貸借によって，利用者に提供するとか，利用者に対して「ありません」「わかりません」の失望を与えないよう，館所蔵の全資料，全職員を動員して，これに当っているが，今後特許，雑誌，初歩の技術書（実用書）等は最も有用な資料となるであろうと考えられるので，その収集については特に研究努力しなければならない。

表6　処理された質問の内容構成

内容別 / 総件数	郷土資料	社会科学	特許資料	自然科学	文学	歴史地誌	その他
615	% 34	% 19.4	% 17.5	% 3.9	% 7.7	% 6.8	% 10.7
前年 513	27.3	25.5	14.0	9.7	8.9	8.6	6

第4節　館外奉仕

1　読書普及活動

昨年3月の民間テレビの発足によるテレビの普及は，読書普及活動の面で，かなりの障害になるものと予想された。しかし，結果的にはそうした心配が杞憂であったことは大きな喜びであった。

読書グループについては別表のとおり，37年度においては，442グループであったのが，38年度は782グループとなり，前年度の1.7倍と大いに躍進を見せた。けれども反面，激増する読書グループに対して，限られた図書資料を，どのようにして供給するか，大きな問題であった。

37年度においては，ともかく1グループに対して5.14冊づつの新本を配本することができたけれども，38年度においては，2.47冊となり，新本に関する限り，1グループ当りの配本冊数がいちじるしく減少した。また，38年度の純増加340グループに対する図書資料は，1グループ平均20冊とみても，6,800冊の図書資料の確保が必要であった。しかし，読書グループに対して貸出すべき図書の年間購入冊数は1,800冊程度であるから，到底間に合わない。そこで，止むを得ず足らないところは，破損して補修したものや，汚損の比較的良好なものまで組入れて貸出しを行なった。図書資料に関する限り，たいへん苦しい年であったといえる。

(1)　移動図書館

読書グループの増加は，主として移動図書館によるものが多い。38年度においては，特に安達，耶麻郡を重点巡回地域として，読書グループの育成を企図し，出張所地教委などの協力もあって，かなり大巾な増加をみた。したがって，利用人員及び利用冊数も前年度をはるかに上廻った。

利用人員では従来男性が女性を上廻っていた。前年度も男53%，女48%と，男性がわずかであるが上廻ってい